

「主体的・対話的な深い学び」を構築する

ウクレレを活用した創作活動の実践検証

Practical verification of creative activities using the ukulele For Independent and Interactive Deep Learning

中山 由美
Nakayama Yumi

要 旨

本研究の目的は、「主体的・対話的な深い学び」を構築するために、創作活動においてウクレレを表現ツールとして活用する有効性を実践検証することである。第1学年で、コードネームとウクレレのコード演奏の仕方（主要三和音のC、F、G₇）の知識を得て、この3コードを使ったメロディのコード進行の演奏を中心にDm、D、Amのコード弾きを習得した上で、本研究内容である第2学年での創作活動を実施した。創作活動は、つくるプロセスを筆者が実演提示した後、「主体的」な学びの場面として、自分のコード進行をつくる活動を設定した。次に「対話的」な学びの場面として、少人数グループ活動で各自がつくったコード進行を持ち寄り、つなげたり、重ねたりし、コードに合うメロディも考え、曲の組み立てを話し合いながら合奏をつくる活動を設定した。検証結果は、創作作品の採譜による分析、授業観察と生徒が記述した授業の振り返りから検討した。その結果から、①ウクレレはギターに比べ安価で、大きさやナイロン弦である点、コードが押さえやすい点から音楽授業で扱いやすく、演奏と話し合いが同時にできる利点があること、②ウクレレは、実感を伴う理解が難しかった和音（コード）に実技を伴って親しむことができることからコード進行を使った創作が可能であること、③ウクレレを活用した創作活動は、個別活動後にグループ活動での取り組みによってより創意工夫のある活動となること、が明らかとなった。以上から、ウクレレを活用した創作活動は、「主体的・対話的な深い学び」を構築できる可能性が高いことがわかった。なお、本研究は、令和3(2021)年度科学研究費助成事業（科学研究費補助金）（奨励研究）課題番号21H03933を受けた。

キーワード：ウクレレ、創作活動、主体的・対話的

I はじめに

1. 問題の所在

平成29年改訂小・中学校学習指導要領総則において、「児童生徒の主体的・対話的で深い学びの実現」に向けた授業改善と評価改善の両輪の必要性が明示された。これを受け、本研究では両輪のうちの授業改善に注目し、「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」に取り組むことにした。「主体的な学び」に関しては、筆者のこれまでの研究成果¹から、ユニバーサル・デザインに基づくアクティブ・ラーニングの題材や場を設定することにより検証が可能であると考えた。そこで、本研究が特に注目しているのは「対話的な学び」である。「対話」の重要性は、「主体的な学び」に支えられ、自身で

考えをめぐらせ、他者の考えと交わらせるというプロセスそのものを、各教科を貫いて経験することにより、基盤的な学習能力を育むところにある。

本研究では、授業改善のためにウクレレが表現ツールとして有効であるかどうか、ウクレレの活用による創作活動において、グループ活動による成果があるかどうかについて検証し、「対話的な学び」の構築の可能性を考察する。

ウクレレを授業に導入した経緯は以下のとおりである。

音楽科における表現活動は通常、歌唱やリコーダー演奏の活動が中心だが、2020年3月以来、コロナ禍による感染拡大防止のために、呼吸を伴うこれらの活動が制限されている。

そこで、弦楽器に注目した。弦楽器であれば手指の消毒を厳重に行えば、不安なく器楽表現に取り組むことができる。さらに弦楽器は、手で操作するため、演奏しながら歌ったり話したりといった様々な「対話的な学び」となる活動を同時にできる特徴があると考えた。

これまでの研究成果²により、本校でのヴァイオリン、三味線、ペグ三線・箏を活用した授業は定着している。一方で、ギターは中学校器楽で扱う楽器であるにもかかわらず、全員が活用しきれない状態であった。それは、楽器が高価³で一人一台の確保が困難なこと、6弦あり、同時に複数箇所を押さえてコード弾きをすることに技術的な困難さがあり、特にFコードなどのバレーコードで挫折する機会が多いことが原因であると筆者は考えた。そこで、注目したのがウクレレである。ウクレレはコロナ禍で在宅時間が増えた2020年以来、演奏や弾き方講座の動画がインターネット上で多く配信され、ブームになってきていた。

ウクレレは、ギターに比べて安価であること⁴、長さが23インチ（コンサートタイプの場合）と抱きかかえられる大きさであること、指が痛くなりにくいナイロン弦4本で、4弦から順にG・C・E・Aにチューニングし、開放弦を弾くだけでもC₆のコードが出せる、など学習者の身近な楽器となる可能性が高いと筆者は捉えた。

また、ギターに比べ、C、F、Gの主要三和音のコードが押さえやすく、初心者でも短時間でこの3コードを演奏できるようになることが期待できる。さらに、ウクレレはコード弾きが中心で、実感を伴う理解が難しい和音（コード）についても、実技を伴って親しむことができ、弾き語りや創作活動も可能となると判断した。

以上のことから、本研究では、ウクレレを活用した授業開発、および「主体的・対話的な深い学び」を実現するための創作活動の授業開発に取り組むことにした。

2. 先行研究

ウクレレを使った実践に関する先行研究は、CiNiiで検索した結果、佐藤（2016）の高等学校の音楽Iにおける報告、岡崎・中（2019）の保育者養成校の「表現」の授業における伴奏楽器としての実践報告がある。また、群馬県玉村町の小学校での「みちくさや」⁵の活動、小学生に向けてのウクレレ普及活動『ウクレレドリームプランたまむら』がYouTubeにアップされている⁶。その他にも高等学校における授業や部活動での実践例は大学生からの聴取によって確認している。

一方で、中学校の授業実践例は報告されていない。中学校の器楽教科書に掲載されているのはギターであり、ギターの実践報告が中心である。

以上から、本研究によって、今後の中学校における音楽科の器楽、創作活動の方向性を示唆できると考えた。

3. 研究の目的

本研究の目的は、「主体的・対話的な深い学び」を構築するために、創作活動においてウクレレを表現ツールとして活用する有効性を実践検証することである。

本研究のウクレレによる創作活動は、第1学年から始めたウクレレの学習をベースにしている。第2学年においては、自分で選んだ曲のコード弾きを練習し、コードを弾きながら歌ってみる活動へつなげ、自分でコード進行をつくり、仲間と共有しながら、ハミング、スキヤットで即興的に旋律をつくる創作活動を設定する。主体的な学びと対話的な学びの両方が設定されることによって、ウクレレを活用した創作活動を通して、ウクレレ演奏にいつそう親しみを感じ、楽しむことができると筆者は考えている。

よって本稿では、第1学年時でのウクレレ活動の導入授業実践、それを踏まえた第2学年での創作活動の実践を提案し、考察を加えることとする。

4. 研究の内容と方法

(1) 研究の内容

- ①ウクレレを活用した導入期の授業開発
- ②ウクレレを活用した「主体的・対話的な深い学び」の場を設定した創作活動の授業開発
- ③創作作品と振り返り記述文の読み取りによる「主体的・対話的な深い学び」の検討

(2) 研究の方法

①授業運営の条件として、主体的な活動を支援するため、一人一台のウクレレと Chromebook を用意し、基礎的技能の習得、インターネットによる情報収集や録音再生が円滑に行えるようにし、コード進行やメロディの創作活動が個人や生徒相互の協働で取り組め、情報交換ができる環境をつくる（「主体的・対話的な深い学び」の場の設定）。

②本研究の授業は第2学年4クラスで実施する。データ分析は1クラス（男子7名、女子20名）を抽出して行う。授業中の生徒の個人活動やグループでの協働的な活動の様子を観察し、作品分析、授業後の「振り返り」の記述文から「主体的・対話的な深い学び」が構築する授業であったかどうかを検証する。

II 研究の実際

1 ウクレレを活用した導入期の授業開発（第1学年）

この項では、ウクレレ活用による第2学年の創作活動の基礎となる、ウクレレを活用した第1学年での導入期の授業開発について述べる。

(1) 題材名 ウクレレの演奏を楽しもう

(2) 目標

- ①コードネームとウクレレのコードの演奏の仕方を知り、主にC、F、G₇のコード進行を演奏できるようになる。この3コードを使った歌のコード進行を演奏できるようになる。
- ②ウクレレのコードの押さえ方（左手）、弦の弾き方（右手）を工夫しながら、滑らかにコード進行を演奏し、それぞれのコードの響きの特徴や違い、コード進行による音楽の表情、ウクレレの音色の特徴を感じ取る。
- ③ウクレレの演奏に興味・関心をもち、おもしろさ、楽しさ、成果や課題を意識しながら活動に取り組んでいる。

(3) 評価規準

- ①ウクレレでC・F・G₇のコードの運指を覚え、滑らかにコード進行を演奏できる。ダイアグラムの読み方を知り、C・F・G₇以外のコードの運指を調べ、演奏を試みる。(知識・技能)
- ②主旋律とコードの響き合いを感じ取りながら、それぞれのコードの音色に耳を傾け、より滑らかにコード進行を演奏するために工夫したり調整したりする。(思考力・判断力・表現力)
- ③ウクレレの演奏方法に興味・関心を持ち、繰り返し演奏練習して上達しようとする。(主体的に学習に取り組む態度)

(4) 授業の展開概要(4時間扱い)

<第1時> ウクレレの操作の方法を知ろう。

- ・チューニングの音高の確認(4弦からGCEA)
- ・弦名、フレットの確認(同じ数字でも意味が異なることを確認)
- ・構え方(ギターとの違い)
- ・フレットの場所と押さえる指の基本の確認(1フレットが人差し指、2フレットが中指、3フレットが薬指をつかうことを基本とする)
- ・Cコードの運指、弾き方の練習
- ・Fコードの運指、弾き方の練習
- ・G₇コードの運指、弾き方の練習

<第2時> コード進行の演奏のしかたを知り、練習して弾けるようになるよう。

- ・C-F-G₇-Cのコード進行でコード間を移動する練習。
- ・「ジングルベル」⁷の弾き歌い(in Cのキーで)途中、「D」も入れる(図1)。

(図1)

<第3時> C-F-G₇-Cのコード進行に慣れよう。

- ・第2時の内容を復習
- ・「さくら(独唱)」⁸のサビ部分(in Cで)に挑戦する(図2)。
- ・曲中に現れるC・F・G₇以外のコードの運指を確認し、弾いてみる(D・Dsus4・Em)。

G C G C G Dsus4 D
ほくらほき、とまっつーきみ とまっつーきみ

C D G G7 C A Dsus4 D
さくらみき のみちのうらでーてまっつーきみ

G C G C G Dsus4 D
とまっつーきみ しいとまっつーきみ はわらていから

C D G D Em
くじや ぬかにやうか けぞも かん

C D G G7
ほくらほき しいとまっつーきみ

(図2)

<第4時> C-F-G7-C のコード進行に慣れてレパートリーを増やそう。

- ・前時までの復習
- ・「ジングルベル」、「さくら(独唱)」サビ部分、の練習をする。
- ・「星影のエール」⁹出だし(オリジナルキー)の練習をする(図3)。
- ・応用編で「残酷な天使のテーゼ」¹⁰(冒頭部分 in C で) (図4)のコード進行を弾いてみる。

ないて うまいて ひびくいのち

C C F C
きつと うれしくてわらっていらんだ

F C D G7
ほくらほきと てあうてよう

C C F C
てまっつーきみ せもおし てあうてよう

F C D G7 C

(図3)

Am さん
Dm こころ
G てんの
C ように

Am 少
Dm 身よ
Em7 神話に
Fmaj7 さん

(図4)

(5) 活動における留意点

- ①チューニングのチェックを常に行った。
- ②右手の指が痛い、との訴えがあり、希望者にサムピックを用意した。指ではじく位置をサウンドホールから外して上部の方に移動させると痛みが和らぐことを助言した。
- ③左指の移動の仕方のコツとして、「たし算、ひき算」の表現で、仲間となるコードと一緒に覚える方法を提示した(図5)。Am⇒F⇒Dm は一か所ずつ押さえる弦が増える。逆にすれば減らしていく。

大事なコード

主要3和音

C (人 中 5) 1 2 3

F ②

G7 ① ② ③

Am ①

Dm ① ② ③

D ① ② ③

たし算 ① ② ③ ひき算 ③ ② ①

(図5)

以上のように第1学年では、ウクレレの演奏に興味・関心をもって、主にコード弾きに慣れて演奏を楽しめるように、C、F、G₇のコードが多く出現する歌をポピュラーソングから選曲して教材とする工夫をしながら、生徒の反応を見ながら授業を進めた。第1学年のウクレレ活動は、ヴァイオリン活動の後に実施したが、擦弦楽器と撥弦楽器の相違点、左指でポジションを押さえる共通点などを意識しながら取り組んでいた。

その結果、3時間目にはコードチェンジにも慣れ、「栄光の架橋」¹¹のコード弾きができるようになって楽しかった、うれしかった、という振り返りの記述が増え、ウクレレに親しむことができる授業運営ができたととらえている。

2 ウクレレを活用した「主体的・対話的な深い学び」の場を設定した創作活動の授業開発（第2学年）

（1）題材名 ウクレレの楽しさを追究しよう～コード進行をつくって歌おう～

（2）目標

①ウクレレでいろいろなコードの運指を調べ、滑らかにコード進行を演奏し、自分なりのコード進行をつくって仲間と合わせて演奏したり、コード進行に合わせてメロディをつくったりできる技能を身に付ける。

②C・F・G₇の3コードを骨格にして、その他のコードも織り交ぜながら工夫して自分なりのコード進行をつくり、学習班で話し合いながら、これまでの学習内容をもとに合奏をつくらうとする。

③成果と課題を意識しながら、活動の目標を持ち、音を出したり考えたりする時間を豊かにもって、仲間の音や意見に耳を傾けながら活動しようとする。

（3）評価規準

①ダイヤグラムをもとにコードの運指を確認し、滑らかにコード進行を演奏し、自分でつくったコード進行と学習班のメンバーのコード進行を演奏し、合奏する技能を身に付けている（知識・技能）。

②いろいろなコードの特徴を感じ取り、工夫してコード進行をつくり、学習班のメンバーと意見交換しながら合奏をつくり、コード進行に合わせてメロディを即興的に作らうとする（思考・判断・表現）。

③それぞれのコードの特徴に興味・関心をもち、いろいろなコード進行を試しながら自分のコード進行を決め、学習班の活動では自分の考えを出したりメンバーの意見を聞いたりして合奏や旋律づくりを楽しむ（主体的に学習に取り組む態度）。

（4）授業の実際

<第1時> 1年次の学習の復習をして、コード進行の創作活動の方法を知ろう。

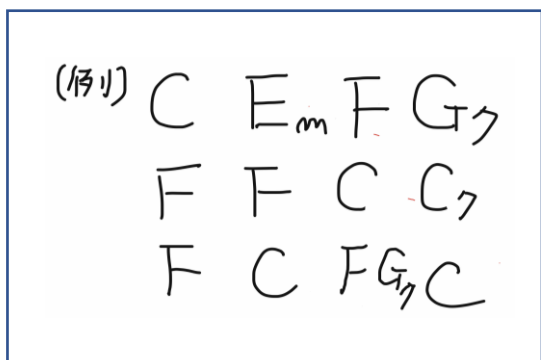
- ・チューニングのチェック、1年次の学習の復習として、C、F、G₇のコード練習、「ジングルベル」「Happy Birthday To You」¹²のコード進行を弾く練習をする。
- ・「栄光の架橋」のサビ部分（in Cで）のコード進行を弾く練習をする。
- ・in Cで使うコードを知る（C Dm Em F G G₇ Am）。
- ・創作の手順を知る。

各自好きなコード進行をつくる→学習班でお互いの作品を弾き合う→合奏をつくる→コード進行の上にメロディをつくってのせる。

- ・コード進行のつくり方を例示する（図6）。

・個々でコード進行の創作にとりかかる（図7）。

なお、和声の禁則事項については特に触れず、自由につくるように促す。



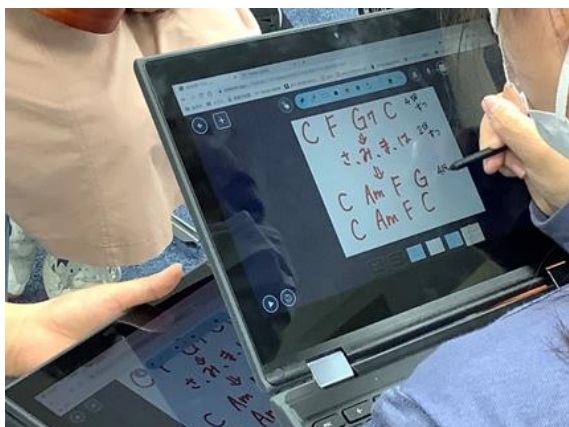
(図6)



(図7)

<第2時>学習班でコード進行による合奏を創作しよう。

- ・C,F,G₇に加え新たにGの運指を確認してつくる。
- ・各自が好きなコード進行をつくり、ロイロノートの提出箱に提出する（図8）。
- ・全員のコード進行を共有する（図9）。
- ・学習班で合奏をつくることを確認する。つくり方は、「つなげる」「かさねる」「一人ずつ」「全員で」などを組み合わせることをヒントとして助言する。
- ・学習班に分かれて、お互いのコード進行を演奏し合い、合奏の構想を練る（図10）。



(図8)



(図9)



(図10)



(図11)

＜第3時＞学習班でつくったコード進行の合奏を聴き合い、コード進行に合わせてハミング、スキヤットなどでメロディをつくってみよう。

- ・学習班でコード進行の合奏をつくる（図11）。
- ・学習班相互で合奏を聴き合い、工夫されている点を確認し合う。
- ・コード進行に合わせて、ハミング、スキヤットなどでメロディを載せる活動をする。

＜第4・5時＞コード進行に合わせてメロディをつくってみよう。

- ・コード進行を何度も聴きながら、思い描くメロディを口ずさむ。
- ・コード進行の流れからメロディをイメージすることによって、コード進行の音楽からメロディが生まれ出る感覚を味わう。
- ・学習班でつくった作品をロイロノートに録音し、提出する。

（5）活動における留意点

- ・チューニングのチェックを常に行う。
- ・活動の実態を観察し、適宜、第1学年の学習内容のフィードバックをする。
- ・合奏の構成、形式に関する助言をする。「つなげる」「かさねる」「一人ずつ」「全員で」等、ヴィヴァルディ作曲「春」で学習した Tutti と Solo（リトルネッロ形式）やバッハ作曲「小フーガト短調」、ソナタ形式など、既習内容を想起できるようにする。
- ・学習班の活動時の配置（感染予防のためのディスタンス保持）を指示する。

以上のように、第2学年では、第1学年での学習を踏まえて、創作活動に取り組み、つくる活動しながら、自然に何度もコード弾きを繰り返すうちに、ウクレレの奏法に慣れ親しんで、演奏を楽しめるようになることをねらって授業を実施した。創作活動は、一人で作る取り組みとグループで作る取り組みを組み合わせることによって、「創作」という一見困難さを感じることの多い活動の心理的負荷を取り除けることが期待できる。

3 創作作品と振り返り記述文の読み取りによる「主体的・対話的な深い学び」の検討

創作活動は、本来「つくっているプロセス」が重要であり、作品の完成度やよし悪しという評価軸で語るものではない。しかし、出来上がった作品と毎時間の振り返り記述文を照らし合わせれば、「主体的な学び」「対話的な学び」の実際が読み取れるのではないかと筆者は考えた。本研究では、ロイロノートに提出された毎時間の振り返り記述文、及び、個々がつくったコード進行の特徴から、グループ活動に入る前の「主体的な学び」の様子を読み取り、グループで創作合奏し、録音提出した作品を楽譜に起こし、録音の演奏を聴いて、振り返り記述文と照らし合わせて「対話的な深い学び」の読み取りを試みることにした。

（1）作品の分析

①個々がつくったコード進行

25名がつくったコード進行（図12）は、次のような傾向がみられる。

（ア）並べたコードの数は9個から21個までである（図13）。例示したコード進行が13個であったが、13個は1名、12個は16名、16個が2名で、4の倍数がまとまりがいいと判断した傾向がうかがわれる。

（イ）「C」で終わっているのが19名、Amで終わっているのが3名で、それぞれハ長調、イ短調

の終わり方である。そのうち14名が「G7→C」、1名が「G7→Am」の終止形を選んでいる。その他は、終止する意識無くつくった、続く感じにした、特に理由がなく選んだと推測できる。(ウ)「C」「F」「G7」「Am」をつかってまとまりのあるコード進行をつくっている。

A 班	Am G7 C G7 C F C G7 F G7 G7 C Am F G7 C	CCG7FF G7C Am F G7C	CG Em G CEm F G7 G7 C C	CF Am G7 F Am G7 C Am G7 F C	E 班	C Am G7 Am F# G A C Am G7 Am	C D E C E F Am F G C G7 C C	Am Am D D G G C G G F F G7 G7	C Em F C F G C F C F G7 G C
B 班	C Am F C G7 Am F G7 C F G7 C Am	C F Am G7 C F D G7 C D G C	F G7 C Am D C G7 G7 Am G7 C C	C G7 Am C G7 F Am G7 C Am	F 班	C Am Dm F G7 F Am F C Am Dm G7 C	G7 G F Dm C F Dm G7 F G7 F Am C Am C C		
C 班	CCFG7 CFFG7 CFG7G7	CG Em F Em Am F G7 Dm G7 C	CCFCFC CCG7CC C F G7 C C C	G7 C F Am G7 F G Am F Am G7 C	G 班	Am F C G7 Am F G7 C C Am G C	CEm F G7 CC F Am FD G7 C	CFFC FFCC FF G7 G7 C C C C	C F G7 C G7 D G7 C G F Am C
D 班	Am C F G7 G C Am Am C F G7 C	C Am F Am C G7 F C F Am G7 C	GC FE7 CA F G CADm C						

(図 1 2)

並べたコードの数	9	10	11	12	13	15	16	21
人数	1	1	2	14	3	1	2	1

(図 1 3)

2) 学習班でつくったコード進行とメロディ

学習班でつくった作品はロイロノートのシートに録音させ、提出箱に集めた。コードネームが記録されたシート、記録のないシートは筆者が採譜し、どのようなコード進行とメロディをつくったのか、特徴を整理した。

A 班 (タイトルはついていない) (図 1 4)

G7から始まり、そのままG7、Gを挟みながら、F、Dm、Amを使い、最後は「G7→C」で終止している。出だしのコードがG7のため、出だしの音高を<B4>にして、曲の途中から始まっているようなメロディづくりの工夫がみられる。二小節目のリズムを反復しながら、付点四分音符と八分音符の組み合わせを多用している。

個々がつくったコード進行の中から、「C F C G」「Am F G7 C」を採用している。G7から始める、新規にDmを採用しているところに対話の跡がうかがわれる。

話し合いの結果、いろいろな楽器との組み合わせを考えたが、メロディを1名がキーボード(ピアノ)で弾き、他がウクレレでコード弾きすることにした、と振り返りの記述からわかった。

♩=90 G7 G7 C G7 C F C G

F G7 Dm C Am F G7 C

(図 1 4)

B班「moist flower」(図15)

コード進行は、禁則が含まれるが、8小節のコード進行で「G₇→C」の終止形となっている。メロディは四分音符と八分音符、四分休符の組み合わせでリズムの反復で構成されている。メロディはキーボードで演奏している。

個々のコード進行の中では、出だしの「C→G→Am→C」のアイデアをそのまま採用し、その他のコード進行は、対話の中でつくっていったと推察できる。持ち寄られたコードが使用されている。

C G Am C G F Am G

C Am G C Am G7 C

(図15)

C班「アキエの逆襲」(図16)

コードの数は少ないが、Amの落ち着いた曲調で、「E→Am」の終止形となっている。四分音符、八分音符、四分休符、八分休符のリズムの反復のメロディである。前奏で木魚の4拍打ちが、最後の四分休符の部分ではウインドチャイムを入れている。メロディラインもウクレレで演奏している。班に木魚の音が好きなメンバーがおり、前奏に4拍入れることを考えついた。それを受け、最後の部分も何かの音を入れようと話し合い、ウインドチャイムの音を入れることになった。個々に持ち寄ったコード進行からは大きく様変わりしている。対話しながら、以下のコード進行となり、メロディ付けをしたと推察できる。

Am C Am Dm E Am

(図16)

D班「WE ARE COMING」(図17)

コード進行に合わせてのカタカナの歌詞で掛け声のように歌っている。「ヘイサッサ ホイサッサ」1・2行は「C」、3・4行は「F」のコードを8ビートで刻んでいる。「C₆」はウクレレの開放弦であり、コード進行はいたってシンプルである。また、ウクレレのボディを手のひらで細かく打ちながらかけ声をかけていた。この班は、作成中にウクレレを打楽器にしてみるとボディが空洞であるため、響きがいいことに気づき、それを取り入れた創作になった。

個々のコード進行から選んだというよりも、対話の中で、ウクレレを打楽器にして掛け声でつくっていくアイデアが主軸となり、コード進行はシンプルになったと推察できる。

ハイッサツサ　ホイッサツサ
 ハイッサツサ　ホイッサツサ
 ハイッサツサ　ホイッサツサ
 ハイッサツサ　ホイッサツサ
 エフツツツ(F)　スツツツ(C)　トウツツツ(C6)
 ホ°ンハツツ　ホ°ンハツツ(C)　:||

(図 1 7)

E班「迷作」 (図 1 8)

コードの構成音とメロディラインが不一致である部分があり、いわゆる「テンション」の響きが見られ、意図的に不協和音をつくっているようである。最後は「G₇→C」の終止形でおさまっている。メロディラインに臨時記号を混ぜてみたいという欲求があったようである。メロディはキーボードで演奏している。

個々のコード進行の中からは、「C→Am」「F→A」「C₇→D」が採用されている。その他は、対話によってつくり上げていったことが推察できる。

C Am C Am C₇ F A D
 C₇ D G₇ C

(図 1 8)

F班「夜明け」 (図 1 9)

Amから始まるが最後はCで終止している。5小節目まではAmで落ち着くコード進行、6小節目以降はG₇、Fを挟み、異なる雰囲気のコード進行とメロディとなっている。メロディは5小節目まで同じリズムを反復する。後半は、4分音符と装飾音のように16分音符で動くメロディを組み合わせたリズムで展開している。

個々のコード進行の中で採用しているものは見当たらないが、メンバーが使っているコードを対話によって並べ直し、つくり上げたことが推察できる。

Am C Am D C Am F Dm

Am C C G7 C F Dm

C Am C

(図 19)

G班「さくらの声」 (図 20)

Amから始まり、Cで終止している。6拍子の部分は、四分音符ひとつにひとつのコードを割り当てている（採譜した結果、6拍子になっていることを確認した）。メロディはキーボードで弾いている。

個々のコード進行の中からは、「Am→F」「C→G₇」以外は新たに創作されている。メンバーから持ち寄られたコード進行で使われているコードを並べ直していることがわかる。全休符2小節部分では、コードを4ビートで刻んでいる。音符と休符の組み合わせを上手に使っている。

Am C G7 Am F G7 C

Am G7 C G7 F G7 F C G7 Am

G7 C G7 C

(図 20)

以上、7つの班の作品から、班のメンバーが個々につくったコード進行をつかって、つなげ方、並べ方、重ね方、繰り返し方、ずらし方などのアイデアを出し合いながら、メンバーのコード進行全てを使うのではなく、新たなコード進行をつかって、さらにメロディをつける活動を行っていたことが採譜によって明らかになった。

メロディをつける活動は、筆者は短時間で鼻歌程度のメロディでよいと考えていたが、キーボードを使ったり、ウクレレを単旋律弾きしてのせたりというように、時間をかけてつくろうとしていたのは、筆者が予想した以上の探究心のある活動であった。

(2) 「振り返り」記述内容の分析

次に、授業後に提出する「振り返り」の記述文を対象に、主体的な学びと対話的な学びの読み取りを試みることにした。

毎授業の「振り返り」の記述には、「成果、課題、展望、感想等」を書くように指示している。しかし、記述する時間が限られているため、4項目の観点すべてについて記述されているわけではなく、各自が強く記憶に残っている内容が記述されていた。また、「振り返り」の提出先をロイロノートと Moodle の2つに設定したが、Moodle は家庭で記述するため、ロイロノート提出の記述と比較すると、文字数が Moodle 提出の方が多い傾向にある。時間が経過してから授業を振り返り、じっくりと考え、整理してから記述されている傾向がうかがわれる。「振り返り」の記述の文字数や内容には個人差がある。

分析の方法は、班ごとにメンバーの1時間目から5時間目までの振り返りを並べ、活動の経過の様子について、記述文を「主体的な学び」の内容として活動内容（成果、課題）に関する記述、「対話的な学び」の内容として他者との交流に関する記述、の2つの観点に分類して読み取ろうとした。

本稿では、記述文の中から「主体的な学び」と「対話的な学び」が読み取れる2名の記述を以下に示す。

まず、C班メンバーTさんの記述である。Tさんは Moodle に提出しており、毎時間、成果、課題、展望、感想の観点で詳しく記述しているので、Tさんの意識、グループでの活動の様子がよくわかる。

ここからは、学習の意図をよく理解し、能動的に取り組み、グループのメンバーとも円滑に話し合いながら、創作活動を楽しんでいる様子が読み取れる。Tさんが発案したメロディが採用されている。

<1時間目>

ウクレレで曲のコード進行を考えました。前回考えた時と違ったメンバーでやりました。

「成果」

コード進行を考える上で大事なのはメロディを意識しながら考えることが大切なのだとわかりました。不協和音にならないようにそれぞれの音を合わせて弾くことでその音が合うのか確かめることができる。コード進行は音がまとまりをもつように意識する。

「課題」

全員のコード進行を共有したけれど、曲調がバラバラでまとめられなかった。曲がまとまりを持って終われない。

「展望」

基本の音を中心としながら不協和音に気をつけ展開していきたい。

「感想」

今回はコード進行について考えました。人を変えると曲調が大きく変わるのが楽しいです。また、先生が、授業が終わってベルが鳴った時の音でコード進行しているのを見て、どんな音でもウクレレでつくることができると知ったり、そのコードでメロディを想像したりすることができました。どんなコードでも少し変えることで全く曲調変わることがわかった。

< 2 時間目 >

今日の授業ではウクレレでコード進行を考え、クラスで共有しました。

「成果(わかったこと)」

～演奏を聞いて～4人での合奏では

- ・(1:3)で1人がベースのような役割を担当して残りの3人が同じコードを演奏
- ・全員同じコードを演奏
- ・カノン形式で演奏
- ・リトルネッロ形式で演奏
- ・(2:2)で交互に演奏

などたくさんの演奏形式があることがわかりました。

- ・ウクレレを打楽器にしていた班もあって面白い発想だな、、、と思いました。

「課題」

—今回の演奏での反省点—

- ①メロディが浮き出て来るようなコード進行にできなかった。
- ②ベースとしていたコードと主なコードがかぶるところがあったりしたところ。
- ③曲調が掴めない。

などの反省点が出ました。

- ①と③ではコード選びに問題があると思いました。具体的な解決策としては、F、G₇、C、Fを繰り返して、不協和音を避けたりする。
- ②では最後にF、G₇、C、G₇、Cで終わらせ、完結させる。

「展望」

- ・反省点を生かしてメロディが浮かんでくるようなコード進行を考えたいです。

「感想(演奏を聞いて)」

それぞれの工夫を知ることができた。演奏形式などたくさん参考にできる部分があり、自分の発表以外にも活かせると思った。演奏形式だけでなくメロディが浮かんでくるようなコード進行やコードの並べ替えなども知れた。また、グループで一つの曲をつくっていく上で互いに一つのものをつくっていく作曲の楽しさを知れました。

< 3 時間目 >

この日はウクレレでメロディが浮かんでくるようなコード進行を考えました。

「成果」

- ・コードを考えていく上でコードの音が重なって不協和音にならないように気をつけました。
- ・コードとコードの間の時間を空けると、中のメロディが考えやすくなり、また、間のリズムを一定にすることでメロディの幅が広くなり、多くの音を入れられることがわかった。
- ・コードを2回繰り返すことでリズムが生まれ、メロディも自然に浮かびやすくなる。
- ・私たちの班ではウクレレの陽気な感じとは反対に悲しくなるような曲を考えました。つくったコードから生まれたメロディは

「ラ・ララシドシラドドレミ ミララシドシラ ファレミミラ」がもとになっている曲です。明るい楽器で演奏すると儂さが増すと思いました。

「課題」

- ・課題はコード進行とメロディが合っていないことです。完成予定の曲には特定のコードで綺麗になるので実行したいです。

「展望」

- ・4人だからこそできることを活かしていきたいです。次の授業では発表もあると思うので、ウクレレだからこそや演奏形式を考えながら練習したいです。

「感想」

今回はウクレレで作曲してみました。まだ一曲しかできていないけど、コード進行を元にメロディを考えていくのは他の楽器でも活かそうと思った。また、4人だからこそできることがあると思うので前回の発表を聴いてみての学習も振り返りたいです。

< 4 時間目 >

この日は班で考えた曲の練習をして本番を録音しました。

「成果」

- ・コード進行を元に曲をつくることができた。
- ・班のメンバーで協力して役割を分担できた。
- ・前回の発表会での反省点を生かして、良いなと思った班の活用ができた。
(具体的には演奏形式で同じところを演奏する人が多くなるほど合わせるのが大変なのでベースが支えるように少人数でできる演奏にしたりしました。また、最後の部分をCで終わらせたなど)

「課題」

- ・本当に完成した時に使った音がベストだったかはわからない。出せない音があったので、代替案が出たが、もっと全体を見て判断するべきだった？
- ・ウクレレの使い方で止めたり響音させたりの表現工夫が足りなかった。

「展望」

- ・今後の作曲課題ではそれぞれの楽器と予定している曲をきちんと結び合わせて頑張りたい。
- ・人数を生かした演奏を考えると曲の感じも変わってくることを活かす。

「感想」

今回を含めてウクレレの創作活動をやってきましたが、この時間を通してウクレレだけでなく他の楽器を使っても、作曲してみるものの難しさを知った。基盤となるコードで曲想が浮かんでも演奏形式や表現方法など考えられることはたくさんあって1番つくりたかった曲にするのは難しいからです。

< 5 時間目 >

この日は録音が終わっていたので録音された他の班の演奏を聴きました。

「成果・わかったこと」

- ・録音を聴いて多くの班がウクレレとは別に楽器を使っていることがわかりました。ウクレレは陽気な音色のイメージがあるので曲想によっては重ねていくことも大切だと分かった。
- ・リズムが一定になるような班もあって全体がまとまっていた。
- ・ピアノを楽器として取り入れている班もあった。最初は打楽器と弦楽器だから難しいのではないかと思っただけ、伴奏側で支えているような役割になってとても良かった。ピアノと合わせるウクレレもすごいけど。

「課題」

曲を製作していく中で演奏形式についての相談があまりできなかったのも、もっとウクレレの良さを生かした演奏形式があったんじゃないかと思う。

「展望」

- ・今後の音楽活動に、ウクレレのコード進行や演奏形式・作曲など分かったことを生かしていきたい。

『感想～ウクレレの授業を通して～』

ウクレレの授業では三味線の時の鑑賞や演奏とは違って創作活動を主にやっていました。自分で曲をつくることは初めてでしたが、コード進行を基盤に考えていくと自然とメロディが出来上がりました。創作活動を通してたくさんのがわかった。また、多くの班の演奏も聴けてよかった。他のクラスの演奏も聴いてみたい。

次にE班メンバーSさん(男子)の記述である。SさんもMoodle提出のため、毎時間詳しく記述している。Sさんはまじめな授業への取り組みであるが、音楽活動にあまり自信がもてない生徒である。自分の考えをもちつつも、グループ活動の中でなかなか発言できずにいるジレンマが読み取れる。演奏技能においてもコンプレックスを感じているようであったが、グループのメンバーからアドバイスをもらい、技術的な困難を克服していく様子が読み取れる。Sさんのように、音楽活動に自信がもてない生徒も、グループ活動によって触発され、前向きに活動に取り組む気持ちになっていることがわかる。創作活動は、グループ活動に適しており、「対話的な深い学び」を構築し、さらに「主体的な学び」へとつながる活動であると本研究はとらえた。

< 1 時間目 >

成果：

ウクレレの創作活動で班の人と話し合う中で、自分自身がつくったコード進行の 1 行目の最後の G と最後の 1 行がやりづらいし、腑に落ちない、という声をもらい、1 行目の最後の G を C にし、余韻を残らせ、最後の一行は消去した。主観的な感じ方よりも、客観的な感じ方のほうが、聴き手に近い(というかそのもの)ので、アドバイスをもらい修正したことは自分にとっても、班の人にとっても良い成果となったと思う。また、個人的な成果なのだが、ウクレレを弾くとき一番下の弦を最後までしっかり弾かなかったせいか、「ビヨン」というような音がかすかに出てきてしまっていたのだが、ウクレレの弦をなでるように優しく弾くと、その音がしなくなった。

< 2 時間目 >

成果：

自分がつくったコードの 2 行目の Am と G の間に何か入れてみた方が自然だという意見を班の中からもらい、自分で考えて F をその中に入れてみたところ、音が階段のようになり、自然な感じになった。似たような音が段階的に連続的に並んだことにより、音が階段のようになった、と感じられたのだと思う。音を階段のようにすれば、どんなに特徴的な音でも、自然に聞きなじみのあるような音に変えられるのだと考えた。

自分がいる班ではどういった流れで演奏していくのか、それを自分が勘違いしていることに気づき、今回、ようやく正しい流れがわかった。まず、最初に誰かがその人がつくったコードを独奏する、そして、そのコードの一番下の行まで来たら、周りの班の人たちも一緒にそこを弾き始める、といったような流れだった。独奏⇒合奏を繰り返すことにより、音に強弱をつくっているのだと、感じた。実際に今回通してみたところ、ほかの人がつくったものを演奏する、ということもあり、少し演奏にばらつきがでてしまった。しかし、その分、ほかの人のコードからいろいろな音の流れに触れることができたので、結果的には良かったと思う。

課題：

今回の授業では、ほかの班の人の演奏を聴くという場面があったが、3 班? のウクレレを使った打楽器と弦楽器の演奏にはこういった演奏の仕方もあるんだ、と驚かされた。今振り返ってみると、自分は他人の意見を尊重しすぎて自分が本当はなにがしたいのか、それを明確に伝えることができなかった。しかし、それを 3 班は見事にやってのけた。もっと今よりも自分に自信をつけられるようにしたい。

展望：

自分が課題を解決するためには、確かな知識が必要になってくると思う。お茶中の有識者の方々のような幅広い知識を身に付けさえすれば、自分が言いたいことも自分の口から言いやすくなるのだと思う。そういった知識を身に付けたい。

感想：

ウクレレの可能性は無限大だと気づかされた授業だった。

< 3 時間目 >

成果：

メロディを大部分つくることができた。自分がいる班はあまりはっきりしたコードが決まっていなかったのもう一度新しいコードを班全員でつくることにした。そしてその後にメロディをつくることにした。メロディはそのコードの一つ一つにあった音にし、聴いていて違和感がないようにした。

課題：

コードとメロディはできたものの、まだ肝心のリズムが決め終わっていないので次回の授業でリズムを決めていきたい。また、コードやメロディをつくる時に班の方々にほとんどの作業をしていただいた。言い訳になるが、音楽の知識が全くなかったので自分のようなものが口出しをしていいのだろうか、という思いがあったのだ。

展望：

自分は前述の通り、ほとんど班に貢献することができていない。このままではむしろ班の人たちに申し訳が立たないので、次回の授業のリズムづくりの作業では積極的に作業に参加していきたい。

感想：

コードやメロディやリズムなど、一つの楽曲をつくっていくだけでもたくさんの時間と技術が必要になっていくとわかり、普段身の回りにある楽曲は本当にすごいなと思った。だから、人が必死につくった楽曲をけなしたり、笑ったりしない、一つ一つの楽曲を尊重していける人になりたいと思った。

< 4 時間目 >

成果：

班の人たちが、残りのメロディやリズムを作ってくれたおかげで、E 班の楽曲づくりがすべて終わった。また、演奏していく上での自分の役割がウクレレのベース？ということに決まった。

課題：

前回の振り返りでもふれたが、自分は積極的に楽曲の話し合いに参加していない。今回こそはという思いで臨んだが、結果的に何も言えなかった。班の人から、何か案がないかと質問され、班の人たちはチャンスくれたにもかかわらず、自分が言ったら何か班の空気が悪くなるのではないか、という思いが込み上げてきたことで、何も言えなかった。次にこれから行われる班のレコーディングについての課題だが、成果のところでも書いたように、ウクレレを弾くことになった。今日楽曲が完成したこともあり、あまり自分が演奏するところを完璧にマスターすることができていない。しかし、そんなウクレレの面でも、班の人たちはメロディの指導やリズムがつかめない自分のためにメトロノームを用意してくださった。自分のことだけではなく、班としての規律を守るために、様々な面で助けていただいた。感謝してもしきれない。

展望：

自発的に発言する場面がもうこの活動ではほとんどないと思うので、自分が弾くコードを自分の体になじませること、メトロノームのリズムを体になじませること、この二つを次の授業までに完璧にしたい。

感想：

次の授業は、おそらく最後の楽曲づくりの活動になると思うので、次の授業では、今まで班の人たちにかけた迷惑の分、頑張っていきたい。

< 5 時間目 >

成果：

前回までで録音する以外のことが終わったので、今回は班の人たち全員で演奏し録音した。今回は班の人たちの足を引っ張ることがないように、慎重に丁寧に与えられたコードを演奏していった。実際にやってみると、前回よりも全体のスピードが速いような気がしたが、そこは臨機応変に対応していった。録音したものを聞いてみると、一か所だけウクレレがミスしてしまったような音が聞こえたが、全体的にはとても良いものになったと思う。また、自分はDからのG₇を指がなめらかに動かないこともあり、苦手としてたのだが、今回はなめらかに指が動いた。

課題：

今回録音しているときも、班の人たちからいろいろなアドバイスをいただいた。もしも今後このような創作活動あり、今回とは別の人たちとすることになったら、必ずしも今回のように創作活動がスムーズに進むとは限らない。よって、音楽について、今よりも詳しくなる必要がある。

展望：

もしも、上の課題を解決するのであれば、音楽の授業とは別の音楽の勉強をしなければならない。しかし、これは自分で無理やり取り組むようなものではなく、自発的に取り組むようなものにしたい。

感想：

ほかの人たちがどのようなことを考えながら、創作活動に取り組んでいるのかがわかり、とても勉強になった。来週からも音楽の授業をしっかりと受けていきたい。

III 結果と考察

1 研究の結果と考察

本研究の結果と考察は以下のとおりである。

- (1) 生徒が創作したコード進行は、C・F・G₇を中心に並べ、Am、Dm、E₇をはさみながら最後がG₇→Cとなるコード進行が多く、弾いて聴いて確かめながら、トニックで終わるようにつくったことがうかがわれる。F、Emで終わるコード進行は、学習班で合奏をつくる際に、つなげる役割のコード進行として使われていた。これは、もちよったコード進行のつなげ方を対話によってアイディアを出し合い、グループのコード進行合奏としてつくっていったことがわかる。
- (2) C・F・G₇を中心にコード進行をつくるという活動は、創作を困難に感じていた生徒にも負荷感なく楽しく意欲的に取り組めることがわかった。
- (3) 学級の間人間関係が円満であることが前提であるが、4名程度単位のグループ活動することは気軽

に話し合える環境となり、新たなアイデアが生まれやすく、創作活動には対話的な学びが有効であることがわかった。音楽経験、知識、嗜好の違うメンバーがグループで音楽活動する際、個々に「主体的な学び」、「対話的な学び」の表れが異なり、アイデアを積極的に発語する、それを聞いて刺激を受けて思考し受容する、といったそれぞれの学びがある。

(4) 創作作品の分析から、深い学びにつなげるためには、各自のコード進行をつくる活動の時間を確保し、各自がアイデアを用意した状態にしてからグループ活動に移り、協働する活動を設定すれば、話し合い活動が活性化し、新しいアイデアが生まれやすく、創作活動が円滑になることがわかった。

IV まとめ

1 研究の成果

本研究では、「主体的・対話的な深い学び」が構築できる授業の可能性として、ウクレレを活用した創作活動を設定した。当初は、個々がコード進行をつくり、グループでそれを持ち寄って、つなげたり、組み合わせたり、変えたりしながら合奏をつくるころまでを想定していた。ところが、活動の様子を観察していた結果、さらに、メロディをつける、録音する、という活動まで発展していくこととなった。その結果、メロディ付けはハードルの高い内容だったことが授業の振り返りから読み取れたが、ハードルが高い分、グループ内での対話が活発になり、アイデアが膨らみ、メロディ付け、録音まで行うことができた。筆者はコードを聴きながら鼻歌でメロディをつける程度に想定していた「メロディ付け」であったが、生徒たちは本格的につくる活動として取り組み、鼻歌ではなく、ウクレレやキーボードで演奏したり、打楽器を入れたりする工夫まで広がった。グループでの活動が相互に影響を与え合い、競い合い、創意工夫の意欲が高まったと考えられる。

ウクレレ活動では、コード弾きを中心に展開すると、和音のサウンドを実感できる。C・F・G₇のコード弾きを基礎力として位置づけ、その他のコードの運指への興味につなげられ、その結果で得た知識と技能を使ってコード進行をつくる、コード進行にのせてメロディをつくるという創作活動につなげられる。また、これまで楽器演奏を経験してこなかった学習者からもウクレレは好意的に受け入れられ、技能的なハードルが低いと捉えられていることが筆者の観察からわかった。

2 今後の課題

本研究では、ギターに変わってウクレレ活動の有効性を検証し、ウクレレであれば創作活動も取り組みやすい、話し合いをしながら演奏もできるウクレレは、主体的・対話的な学びを引き出す活動に適しているということが創作作品の分析から明らかとなった。しかし、「主体的・対話的な深い学び」を学習者の生の声から立証する方法がまだ確立できていない。生徒へのインタビューや授業の振り返り記述文から読み取ったりすることを試みたが、研究結果としてまとめることが困難であった。研究の成果を今後の生徒の音楽活動の表れから読み取る方法を模索し、継続研究していきたい。

【参考文献】

岡崎美鈴・中典子：歌の伴奏楽器として「ウクレレ」を用いることの可能性 — 保育者養成校の「表現」の授業を履修した学生の自由記述より —, 中国学園紀要 = Journal of Chugokugakuen 18 129-134, 2019.

佐藤雄紀：高等学校の音楽 I におけるウクレレ指導についての一考察 — 授業実践と事前事後アンケート

ト調査を基に教育楽器としての可能性を探る一，玉川大学芸術学部研究紀要 7 53-68, 2016.

¹ 2019 年度奨励研究（課題番号 19H00080）研究課題「音楽授業におけるユニバーサル・デザインを構築するアクティブ・ラーニングの実践検証」

² 2014 年度奨励研究（課題番号：26908034）「擦弦楽器の演奏体験が及ぼす表現及び鑑賞の能力伸長の可能性」における 1 万円ヴァイオリン活用の実践、及び、2016 年度奨励研究（課題番号：16H00139）研究課題「弦楽器演奏を中心としたコンピテンシー・ベースの授業開発」におけるペグ三線活用の実践。

³ ギターは、例えばヤマハクラシックギターCG102 の場合、¥27,500（税込）である。

⁴ ウクレレは、1 万円弱でコンサートタイプのウクレレが購入できる。また、音楽室内に保管するためのスペースは、ウクレレはギターの 3 分の 1 以下ですむ。

⁵ 「みちくさや」(<http://michikusaya.info/index.html>,2022.5.15 閲覧) は、2012 年よりウクレレ教室を開いたり出張授業をしたりしている。『音楽の授業でウクレレ』の取り組みは、平成 26 年度玉村町協働によるまちづくり事業として採択され、【ウクレレドリームプランたまむら】という団体が主催している。玉村小学校、上陽小学校、南小学校の 4 年生の音楽の授業として、また、芝根小学校、中央小学校では、クラブ活動としてウクレレを採用している。<http://michikusaya.info/dreemplan-tamamura/tamamura.html>,2022.5.15 閲覧

⁶ 「小学校の音楽授業でウクレレをするという取り組み★群馬県玉村町」

https://www.youtube.com/watch?v=cKTZR_rursI,2022.5.15 閲覧

⁷ 「Jingle Bells」宮沢章二作詞・ピアポント作曲

⁸ 「さくら（独唱）」森山直太郎作詞・作曲

⁹ 「星影のエール」GReeeeN 作詞・作曲

¹⁰ 「残酷な天使のテーゼ」及川眠子作詞 佐藤英敏作曲

¹¹ 「栄光の架橋」北川悠仁作詞・作曲

¹² 「Happy Birthday To You」の原曲は、パティ・ヒルとミルドレッドの姉妹による「Good Morning to All」である。